

勝新太郎・映画を語る

インタビュアー 和田誠



「不知火掬枝」(60)

映画は偶然できたものが完全

一九八〇年代の前半、ぼくは「文藝春秋」に連載を持っていた。会いたい人に会い、話を聞き、絵と短い文章にまとめる、というものである。その仕事で勝新太郎に会った。初対面だったが、勝さんは二時間たっぷりしゃべってくれた。しかしぼくに与えられていたスペースは印象記のための少い誌面だったから、対話の全貌は伝えられなかった。そこで、今、ぼくの手許に残されたテープをもとに、その日の勝新ぶしを再現したいと思う。

時は一九八二年十月十二日夕刻。場所は赤坂プリンスホテル旧館のレストラン。登場人物は勝新太郎、和田誠、「文藝春秋」の編集者、勝新太郎のマネージャー。話はいくつかのうろたえから始まった。

勝 今、階段上がってるとき、昔知ってた奴が声かけて、「おお、元気かい」って言うから「元気です」って。そいつは共通の友だちで景気よかった奴がいて、昔お互いにお金を貸してたんだね。あいつ、今どうしてる」ってきいたらダメだって。「それじゃあ助けることも助けられることも両方だめだな」って言ったんだよ。面白い奴はやっぱり倒産しちゃうんだよな。

勝プロが倒産した直後の会見だったのである。この時点で勝さんはぼくが何者なのかよくわからなかったらしい。倒産に関する話をききに来たレポーターと思ったふしもある。それでこちらが質問をする前に、こんなふうには話し出したのではないだろうか。大サービスである。

そこへウェイターが注文をとりに来た。勝

してました」「じゃあ、つなげ」「でも、あそこはカットになってました」「いや、カットなんて監督の声だけだから」「本当に嫌な世の中でございますねえ」って言って、たった一粒の御飯をおいしそうに食べたところがあつた方がいいのか、どっちがいいかわからなかつたけれども、とりあえず、一粒の御飯がよくもついていたなど。この芝居の最後のカットで小指に御飯粒つけようなんて思つて芝居してたわけじゃないから。偶然ついたのをたまたま食べた。それを捨てられちゃうつていうとそれはダメだ。映画にならない。

和田 客の立場で言つても、あつた方がいいですね。

勝 そうでしょう。そうするとお客はそこま

で台本があると思つて見るわけですよ。

和田 計算してやつてると思つて。

勝 本当はないんだと。だから、そういう場面があつた方がいいし、また、そういう場面を見抜いて、台本にはないけどジューツとしてくれる監督ね。森一生さんという監督がいま

すね。あの方は早撮りで、本当に早く撮るのが幸せの不幸なんだな、あの森さんは。

和田 「不知火検校」(60)が森さんですね。

勝 ええ。俺は目をつぶつて、その頃は本当に目をつぶつて芝居しててね。こう歩いてて、人を殺して、その金を懐から取るところがあるんだけど、映つてるの見たら、俺の顔写してないで、手にパンしてずつと財布のところへ行つちやつてるわけ。その方がはるかにいんだね。手は芝居してない。顔が芝居して

たんだ。顔が写つてると思つてたから。あ、なるほどな、映画つていうのはこういうこと

があるんだなつて。芝居してないところを撮る。

和田 最初からそういう魂胆があつたわけじ

やなくて……。

勝 ないんですよ。森さんに「どうしますか」つてきかれて「パツと動きたい」「それじゃここから行こうか」つて。だから勉強になりましたね。カットかけない人だから。例えば俺が亀のスープにする。カット。次にあなたにボーイさんがメニューを渡すところやりますよ。「俺、亀のスープにする」、そうするとメニューがそつちへ行く筈だから、こつちは何も芝居しないですね。ところが監督はカットかけない。もつと芝居しなくちゃいけないのかな、なんて思つてる……。「カット」。『今そつち見ましたけど』「ああ、いい。それでいい」。

芝居が終わつてからの自分の方がはるかに稀少価値なんですよね。カットつて言われるまでの部分は商品価値です。勝新太郎つていう商品が何かしてる。台本がそれ以上ないんだから、ここでカットと思つて芝居しないで……おかしいなあ……。「カット。それを待つてたんだ、ずつと」「ああ、そうですか」だから、頭とケツつていうのかな。

台詞つていうのは「亀のスープ」つて言つても、昼間も亀のスープを飲んだのか、それとも飲んだことがないのか、そんなものがこの世にあつたことも知らない人間だったのか、それともしゅつちゅうこういう高級な料理を食べてる人間なのかつてことは、台本は教えてくれないんですよ。

フランス料理屋で四人の男たちがビールを飲んでる。真ん中にテーブルが置いてある。

一人の男が喋つてる。「俺は亀のスープにします」つて、そこから台本が始まるわけでしょう。そうすると「じゃあ、私は同じにしようかな」とか。「ワインがある」「いや、ビールでいいですよ」こういうのが全部頭の中に

入つちやつてるから、俺は台本はいらないと、こつち思つてる。

ある俳優がいて、ある物を書く人がいて、雑誌の担当者や俳優のマネージャーがいて、たぶん喋るのは映画の話です。喋れる限りどんどんどん喋つてくさい。恐れ入りですが、あなたはただじつと聞いていてください。あなたはそのどんなにノツてるときでも質問したいときはいつでもしてください。この人はいつも聞いているから、早く時間が過ぎればいいなという感じ。はい、回していいこう。「これ、テストだからNGでいいですよ」つて俺が言つて回させちゃう。テーブルをあつて聞いてみて、「俺の台詞多いな。こつちでこうきいてくださいよ、そうしたらこつち返事するから。こつちのときにお前はちよつと耳打ちしてくれ。新幹線の時間のことについて。俺が一所懸命喋つてるいちばん大事なときにパツと耳打ちする、そうするとこの男はこの場面に對して愛情のない人間だつていうことがよくわかるから」……一回撮つて初めてわかつて、演出し始めるんですね、俺は。前の日に台本は線引つぱつてアップだとかロングだとかつていうことは絶対ないわけだから。

「影武者」の恨みつらみは何もない

和田 そうなるとやつぱり、黒澤さんの演出とは全然違つてですね。

勝 うーん、そうですね。違わなくはないんですけども。黒澤さんのやつてきたことは大したものであるんだけど。あれだけ大したものだと思つてた黒澤さんとああいう形になつてあれの恨みつらみは何もないんですよ。私は何もなし。黒澤さんが子どもだつたとか大人だつたとか、俺が子どもだつたとか大人だつ

たとかつていうことじゃなくて。「演技者として、オーディションする素人さんと、それから動物と、黒澤さんの頭の中に三種類あるとしたら、俺は動物の方に入れてくださいよ。動物は、カメラがこつちで撮るからこつち向いてください、こつちでもつて目で怒つてくれとかいうことはありませんよ。俺の感情で動くからカメラがいくら正面から撮つても俺はスツと後ろ向いちゃうかもわからない。偶然合うかもしれない。そしてそれが最高だつていうことになつたわけだね。黒澤さん

長屋の八つあん、熊さんを演るんだつたら「お怒りにならないで。肩の一つも揉みませう」とか「まあ一杯飲んで。あつしが悪うございました」とかつて言える。武田信玄が一回でも黒澤さんに対して「すみません」て謝るんだつたらもうやらない方がいい。武田信玄が「俺は映画撮つてくれて頼んだ覚えはないんだから。そつちが撮りたいつて言うんだつたら撮らしてやる。あんまり、あつち向いてこつち向いてはなしだよ」つて。

和田 その段階では合意してたんですね。

勝 もう、大合意。黒澤さんも「勝さんがそういうふうにしてくれるんだつたらこれは成功したと同じだ」つて言つてたぐらいいから。これから歴史的にもが伝わつてくかもわからないんだけど、ビデオの話、あつちにもこつちにも書いてあつたけど、あんなものは全然違つて。そうすねえ、例えば、今まで俺がこつちに来たらみんな立つて迎えてくれた。煙草出したらライターで火を点けてくれた。コップ持つただけでビールをついでくれた。次に俺が座つても誰もビールをついでくれない。笑いもしてくれない。煙草に火も点けてくれない。



侮辱もされた。それでも生きてる、それでも必ず立ち直ってみせるって強い男が、あるとき煙草を持った隣にいるマネージャーが火を点けなかった。たったそれだけのことで、今夜自殺しよう、そういう決意が生まれるかもしれない。人間っていうのは。それを世の中の歴史として残したら、あまりにも勝新太郎は下らない人間で終わっちゃうから、何かもう少し理由をもって自殺したい

うふうにしてあげようと、作家か誰かが一言うまいこと書いてくれるってことがあるでしょう。
黒澤さんと俺はちっとも揉めてなかった。いちばん揉めない理由で揉めた。お互いに、一回俺が言うこと聞いたんだからそっちも一回俺の言うこと聞けよとか、そういうのを言い合うのはやめましょ。人間同士の面子だとか、人間のレベルの高きだとか、そういう

下らない喧嘩はやめましょって話しあった。よく監督さんとあるんですね。例えば、この場面のトップシーンにビールがいっぱい入ってる。監督さんが「はい、いきましょ」って言った時に出演者の俺が、「ちよっと待ってくれ。これ、今から始まる場面かい」「いえ、さっきから随分話してるってことで」「じゃあ、もう少しビール下げておかないとおかしいじゃないか。随分飲んでたっていうところから始めない」と言ったら、「いや、そのままやってください」「なんで？」「いや、いいんです」「少し飲んだところから回すの？」「使うのはそこから使いますけれども、とにかく置いてください」とかって自分の面子を立てるための弁護士を持つちゃうわけだね。確かに最初にいっばいっいであつても編集で頭は切っちゃえばいい。俺の出した意見の方が正しいんだけれども、それを先に言われると腹が立つっていうことがあるんですよ。監督さんっていうのは。ある程度の感覚的なものを持っている人っていうのはちよっとしたところでは性に合わないっていうか、そういうのがきつと何回かあったんだ。

錯覚もあった。衣裳合わせしてる時に、黒澤さんが左側に立ってた。俺、こややる（左手の指二本を立てる）のが癖になってる。こややるとうちの弟子が煙草をはさんでくれる。黒澤さんの向こうに弟子がいるから、そっちに向かってこややったら黒澤さんが煙草をはさんで火を点けてくれた。やっぱり大した監督さんだな、俺の信玄に対して監督がこれだけ気づかってるんだってことを助監督や何かに見せるためにそうしてくれたんだなって思ったわけ。それは錯覚の感謝だった。黒澤さんの方も俺が向こうにいる弟子に言っ

勝 だから、さつき言ったように「わかりました」って感じてしよう。

和田 八つっあの役だったら。

勝 あんなこと言いませんよ。

和田 そういふもんですか。僕がファンとして残念なのは、勝さんじゃなければあの映画は成り立たなかったということです。人間の魅力みたいなもの、影武者のキャラクターは勝さんじゃないとダメだ。

勝 長屋に似合って、床の間背負っても似合う男っていうと、勝新太郎っていうことになるんだな。今日みたいにこういう店に来て、「何しなすうか」と言われた時に、「これはどういふもんだい？」と聞ける武田信玄をやりたいわけね。そうでないとおかしいと思うんですよ。戦略的には優れた人かもわからないけど、食道楽だったとは思えない。床の間に座ると何か落ち着かないから、下座へ座るってえと誰もこち見てくれないから非常に楽で、何やっただっていいわけですよ。その時の楽しさのまま床の間に座ればいい。だから末座が似合うんだって床の間だって似合うんだ。

和田 あの作品はご自分が出てたら傑作になっただけだと思いますか。

勝 僕はそれを言いました。誰が出て、ただテンポが違うだけだろうと。

信玄には刀傷がある。だつたら影武者にする盗人にも湯殿かどこかでもって後ろからスパーンと切って傷つけて、天日にかけてたりして乾かして、同じような傷にするとか何かするののかわつてきたら、「そこはいいんです」と。「そういうのは演出で跳び越えますから」と、黒澤さん、そう言ったから、なるほどな、俺よりよっぽど黒澤さんの方が大きいんだな。俺なんかそういうところでつまずいて、どう

しようかなど考えるけど、「演出で跳び越える」。側室が「あ、傷がない」なんてあんなところで大きな声で言う。見たらパツと隠してそつと連れて行かなくちゃならない。

最後に雑兵になって脅えて見てる。そうじゃない。追われた時は信玄である。自分は信玄になってるんですよ。しかし燃えつきたことで、信玄のままに鉄砲に撃たれなくちゃ。これはたくさん意見がありますけど、俺はそう思う。

和田 信玄に惚れ込んでないで信玄になり切れませぬ。

勝 だから、彼はどこで信玄に惚れたんだっていうことを聞いたことがあるんだよ。初めて会った時の印象なのか、諏訪湖に遺体を沈めるのを見て、あの厳肅な瞬間に思っちゃったのか。

和田 若山(富三郎)さんが信玄をやった勝さんが影武者をやるっていう話をきいたことがありますが。

勝 そうじゃなくて兄貴は山崎(努)の役。

和田 あ、そうですね。信玄の兄弟で、それまで影武者やってた人物ですね。情報が違うように伝わってました。とにかくその人物と信玄と影武者が並んでるトップシーンは絵がともきれいでした。

勝 そつれから最初にパーツと走ってくる……。

和田 城に伝令が来るところですね。

勝 あそこまでが宮川(一夫)さんだな。(註・撮影の宮川一夫は病氣のため途中で交替した)

ストーリーがどんどんできちゃう

和田 宮川さんと言えば、ぼくは「座頭市千両首」(64)が大好きで。タイトルの黒パツ

クの中に三度笠の男たちが出てくるどころなんかとても良かった。宮川さんとは随分一緒になさつたでしょう。

勝 うん。本当に宮川さんにいろいろお世話になった。やっぱり日本の風景撮れるカメラマンっていうと宮川さんでしょうねえ。

和田 「不知火検校」は、脚本の段階で勝さんに合わせて書いてあるんですか。

勝 いえ、あれはやっぱり原作ですよ。たまたまテレビで、勘三郎さんがラストの花道を去って行くところ、「手めえたちは俺みてえなことがやりたくても肝玉が小せえからできねえ。たまに楽しむといたら禁ぐれえが関の山で、挙句の果てには爺いになり婆あになり、糞小便の世話をされて死ぬだけだ。この大馬鹿野郎」って、そこだけ見たわけ。これは面白い。これどうしてもやりたいって言って、宇野(信夫)先生、京都に来てるっていうんで旅館まで行って頼んだ。

そうすると「あなた、俳優さんですか？」って言うから「勝新太郎と言います」「できますか。お芝居、むずかしいんですよ」「いや、先生のは昔から、子どもの頃から『春の泡雪』とか」「え？『春の泡雪』見たんですか」「ええ、見ました。あれも見ました、これも見ました」と。「沢瀉屋の台詞がこうで」と声色使ったりね。六代目の声色使ったり。(註・沢瀉屋は二代目市川猿之助、のちの猿翁。六代目は、六代目尾上菊五郎を指す)

「あなた、いけますね」っていうところへ大谷さん(竹次郎、松竹会長)から電話がかかっちゃったんだよ。勘三郎さんがアメリカから帰ってきたら映画にしたいって言うんですよ、松竹が。これはちょっと難しい。でも私もこれ、勝負かけて映画にしたい。

そうしてたまたま宇野先生が長唄が好きだ

ってことになって。「綱館」が好きなんですよ。茨木童子のね。四天王の渡辺ノ綱がその腕を切った。それをお婆さんになって取り戻しにくるっていうストーリー。それを私が弾きましよう。「なんであなたが知ってる」。って。「親父がこうだった」「え？お父さん、杵屋勝東治さん。そうですか」っていうことでポンポンポンと話が決まった。

いろいろあったんだけれども、犬塚(檢)さんは徳の市っていう子どもが菓子折を持って「おっかちゃん」と帰ってくる、というふうには台本に書いた。ところがお金じゃなくちゃいけないって言うのね。先生が。原作者が。親孝行になっちゃうって言う。

菓子折を持って帰ると親孝行になる。俺はそれがよくわからない。映画っていうのは菓子折りをかっぱらってくる絵だとか、お酒飲むところ、鼻をピシャーンとかんで「目が悪いから許してください」なんて絵がありますよ。そこが演劇の人どもの考え方が違うのかな。絵で見せる違いがね。

和田 「不知火検校」は勝さんの企画だったんでね。

勝 そうそう。「悪名」(61)もそうですね。たしか汽車の中で読んだんだけれども、朝吉さんの子どもの時、姉さんが針仕事か何かしてる。姉さんのお尻のところ、だんだん悪戯したくなる。獲返りうちながらお尻のところ、寄って、姉さんのお尻の匂いにかこうとするのね。「アサ！われ、何しとんじゃあ！」って蹴つとばされて表に出ると悪戯鬼どもが「どないしたんや」「ケツかいだら蹴つとばされたんじゃあ。ゆうべシヤモとやる夢見たんじゃい」「なんやわれ、シヤモとやるんか」っていうようなところだけ読んだわけ。天下の朝日新聞がこんなものを小説にしてって扱

書がものすく come たってんですよ。(註・「悪名」は「週刊朝日」の連載) 投書が来るぐらいなら面白ってんで、今(東光)先生のところに行ってもらって来たわけ。やっぱり面白かったですね。

和田 面白かったです。あの頃は大変だったでしょう。「座頭市」と「悪名」と「兵隊やくざ」だったから。とっかえひっかえやってましたね。

勝 だからよく見るとわかるんですけどね。一番最初の「座頭市」(「座頭市物語」・62)

なんか、平手造酒を斬ったあとで、飯岡の助五郎に「手めえのために死んだ男たちが犬死にとも知らないで死体をさらしてるんだぞ。何が嬉しい、何がめでてえ」って怒って杯を返しちゃう。それでお寺へ入りますね。これツルツルに刺ってるわけですよ。寺から出てくると子分がかかってくるんで、突きとばすと川に沈んでっちゃう。市がその音聴きなが

ら黙って去っていく。そのところからボツとこれだけ毛が生える。なぜかっていうとその三日ぐらい前から「新・悪名」がクランク・インしているわけ。「座頭市」やってて「悪名」が入っているわけですよ。だからだんだん伸びてくるわけよ。順番に撮っていくばいいんだけど、こういう撮り方してるから、毛がある、毛がない、毛がある、毛がないっていうのがしょっちゅうだった。昔は。

和田 でも、クリクリだったのは一本目だけですよね。

勝 あと、三船(敏郎)さんとの「座頭市と用心棒」(70)っていうのでクリクリにしたんですよ。

和田 あ、そうでしたね。細かいところも全部覚えてますか。何本目の「半破り」はどうだったとか。

勝 そうですね。場面場面はだいたい。さっき話したような映画の作り方だから。台本持

って入ったことないですからね。その役だけ掴んで。だから、自分が行く土地の笠間とか利根川とか、我孫子から取手はどう抜けたいいんでしようとか、そういう捨て台詞ができるようなことだけを覚えておくわけですね。台詞を覚えなくても相手役の人が「おめえ、市っていうのかい」「へい、按摩はみんな、市って呼びます」とかね。そのときによつてどれがOKでどれがNGになったかわからないけれど。もちろん台本をもとにしてるんだけど、もちろんか面白いのが出てきやすいんですよ。「座頭市」っていうのは。

和田 アイデアがいろいろ。

勝 こういふところでも、例えばあなたが煙草を持ったとしたら、しゃべりながらこうやってスッと火を点けてすましてる。なんで煙草持ったのがわかったんだらうって。何でもない場面だけいい場面になっちゃうわけだね。ビールつぐにしても、目のあいてる人がビールこぼしちゃってるのに、座頭市はドドドドキョッって泡までピチッと決まるとかね。そういう場面が良くなっちゃう。

和田 そうですね。女の行水覗くとか。

勝 そうそう。あれは僕の思ったアイデアの半分ぐらいしかできなかったんだね。本当は雨が降って足止め食って大部屋でいろいろな人がしゃべってるわけですね。ガマの油売りもいれば易者もいる、猿回しもいる。祭を目当てに来た行商人がいたり、侍もいたり、心中ものがいたり。一方、雨がパーツと降ってくるころを三度笠の男が三人ばかりこっちへ来る。世間話してる中へある男が入ってきて「おい、たまらないよ。行こう、行こう」ってみんな行っちゃう。台本には「おい、すげえ女がこんなおっぱいして、こんなケツして

たまらないや。見に行こう、見に行こう」って書いてある。それだとすぐわかつちゃうから、「おい、……」だって。たまらねえ。行こう、行こう」これだけしか聴こえない。で市もついて行っちゃう。それで障子に穴開けて「俺は盲か」。ここで初めて盲だと気がついて去って行く。さっきの三度笠の三人が宿に入ってきて廊下。市が歩いている。カメラのこつちへ来てスパスパって斬っちゃってみんな倒れる。誰が斬ったかわからなくて、さっき女を覗いてた連中が調べられたりなんかして、市はもう一人で旅をしてるっていうトップシーンです。そんなのが想像できちゃう。それを話すでしょう。「勝さん、覗いてから俺は盲だったかじゃあ、いつもの勝さんの完全主義の考えからいっておかしくないですか」「これはおかしくないだろう。これは遊びだから。これは娯楽だから。笑いとベロソス、プラス・アクションがある」。話してるとストリーイっていうのはどんどんどんできちゃうんだけれども。それだけにテレビの「座頭市」はしんどかったですね。息苦しくなってきたね。

和田 毎週は大変ですよ。

勝 毎週正月だから。どこか抜きゃあいいんだけれども、三十年も前の白塗りのやつがときどきテレビに出るでしょう。

和田 化け猫ものなんかが出ることもありますがね(註・新人時代の勝新太郎は「怪猫怪魔」が辻一ほか数本の怪猫映画に出演している)。勝 うん。ああいうの見ると本当に眠すか。いっていか。その恥ずかしさを一度やりたくないと思うから、どうして一本、本残るものに。嫌なんだな、あとで見て何たって言われるのがね。

和田 女の人々が杖で市を引っかけてあげて、



彼女が気がつかないうちに抜いて何人か斬って鞘に収めちゃうのがありましたね。

勝 あれは……森雅之さんが出たやつ。「あばれ火祭り」(70)かな。

和田 森さんが闇公方というような、向こうも盲でちょっと怖い役で。どんな座頭市が強くなってきたから、相手役も大変だったでしょうね。

勝 そうですね。

和田 「続・座頭市物語」や「千両首」の若山さんはすごく強そうだからいいんですけど、座頭市が危ないと思わせないといけないの、うっかりすると座頭市の方が絶対強いって感じるがありました。

勝 それは俺の責任もあるんだな。世間のファンがヒーローにしてくれたんで、それを自分までが強いと思ひ込んだっていう錯覚もあったのかも。やっぱりいちばん最初のように駕籠屋に怒鳴られたり、百姓家で「水ください」って頼んで飲んだりね。駕籠屋に「釣はいらねえよ」なんていう座頭市になっちゃいけないわけですね。いまだに座頭市のベストは、自分の思ってるものは作ってないんですよ。こういうものが当たるかっていうとそうでもない、興行的なこともあるし。

それとねえ、映画館に行ってるセールスの人やなんかは、「この間五人斬った座頭市が今度は十八人斬るんだから買ってくださいよ」なんていう、昔はそういうセールスですよ。

和田 映画でまた座頭市をやってみようと思ふことは？

勝 それはありますよ。今度やるときは、今までの座頭市にいろいろなシーンがあるから、思い出の場面も座頭市の思い出として入れて、座頭市の「風と共に去りぬ」版みた

いな、そういうものを作りたいな。齡とっちゃってね、犬一匹、孫みたいな子どもと釣りでもしてる。ところがひいおじいちゃんの頃から狙ってる何代目かの座頭市を殺すっていう集団がまだいるんですよ。

和田 そういうのやると、それが最後になりますね。

勝 最後になっちゃいますね。

最近時代劇について話しあえない

和田 最近、映画ご覧になってます？

勝 ほとんど見てないですよ。それよりも今、二十四時間ずっと編集されてない映画見るようなものでしょう。僕の目から見たら、どこを見たって僕のカメラで見るわけだから。

和田 映画の企画って随分来るでしょう。

勝 来ますよ。

和田 断ってるんですか。

勝 ま、断ることに結果はなっちゃうんだけれども。いまやっぱり、絶対にお客が間違いない入るってものを作りたいから。

和田 昔は間違いない入りましたね。ぼくは勝さんの映画は「かんかん虫は唄う」(55)から拝見してます。

勝 あ、そうですね。あれが大変だ。

和田 歌もちょっと覚えてますよ。

勝 ムタララララランってね。「かんかん虫」の時は祇園町から通って。忘れもしない、金曜日なんだけれども、祇園のお茶屋で朝八時頃目を覚まして。そうしたらおばさんが「時間どっせ、時間どっせ」って言うから起きて冷蔵庫開けて、牛乳を見たら金曜日って書いてある。それをガーツと飲んで具合悪くなっちゃった。ガーツと戻して。そして

先週の日曜日のやつだった。馬鹿野郎、し

みつたれ、先週の置いとくことないだろう。それで覚えている。

和田 「子連れ狼」(72)も勝さんのアイデアが入ってるんですか。

勝 うん。

和田 殺陣がすごくよかったです。

勝 兄貴は殺陣うまいですからね。あれ、撮り直して、兄貴が機嫌悪くなっちゃった。

和田 勝さんが取り直しを要求したんですか。

勝 うん。プロデューサーだから。

和田 今、時代劇のいいのがなかなかできませんね。

勝 できなくないんだけれども、うーん。つまりバーマネットのセットがなくなっちゃったでしょ。現在置いてあるセットっていうと、テレビ用のセットですね。いいセットがあれば柱一つにしたって廊下を下からローアングルで撮った時にビヤッと。35ミリで。両替屋とか呉服屋とか。御殿にしても何にしても。

ローションのいい場所があれば、セットよりもはるかに歴史的な木があるわけだけれども、あんまりローションにお寺も貸さなくなってきたり。馬、人間。ローション行くの二時間ぐらいかかるでしょう。朝八時に出発したって着くのが十時。十一時半ぐらいでワンカット回して昼飯になって。それからずと撮ってたって夕方日が暮れるのが早かったり。

和田 昔はもっと近くで撮れたわけですね。自分の撮影所になりましたからね。オーブンセットっていうのはたいがいマンションが建っちゃってますよ。

和田 映画村は？

勝 どこか美容院に行きたてみたいな感じですよ。逆に海外に行くともニューヨークでもロンドンでもローマでも、明治とか明治前の

匂いがあるところがある。日本にはあんまりないわけね。飛騨の高山とかね、そういうところに行くんですよ。いいけど。あそこだったら撮れますよ。その代わり、いつもそこで撮るんですよ。

和田 いいロケ地に合わせて台本を書くんですけども……。

勝 書きやすいってことでしょ。でも本当は本をロケ地に合わせるかと予算に合わせるっていうことじゃなくて、思う通り書いてもらうのがいいじゃないですか。

和田 それはそうですね。

勝 だけでも、マーケットとして日本の池の中に——言い方は悪いけども——魚がどのくらいいるかと。その魚の好きな餌はなんだと。昔だったらこういう餌だったけど、いまの魚はそんなもの食わなくなっちゃった。いまはビスケットとかチョコレートとか、そういう方を食うんだ。となったら、そんな連中に見て来てもらうのは嫌なんだ、俺の昔の餌でもって来てくれる映画ファンを求めたんだって言ってやっていると、やっぱりダメだしね。

和田 それがないから昔の映画ファンが今映画館に行かないということがありますよ。勝 やっぱり時代劇は予算がかかりません。それから時代劇を学んでる監督さんがいない。時代劇について話し合えないね。たとえば、「お前、酒好きか」「ええ」「どこで取ってる」「うちの近くで」「そうじゃない、時代劇で言ってみろ」「三河屋です」とか、「お前、どこに住んでるんだ」「長兵衛河原に住んでます」とか、すぐに言ってもらいたい。落語も研究しなくちゃいけないし。わっち、おいら、手ぬえ、身共、それがし、拙者、我等、女はあちち、わっち、あたし、わたくし、いろいろありますわね、言葉は。それがやっぱりユ

「I・アンド・ミー」になっちゃってるのね、日本も。あんたとか俺だとかですんじやってるからね。

「台本なんかでも「今日は」って「今日」の「日」の「は」って書いてる。「なんだよ、魚屋だろ。こん、いらねえんだから取っちゃえちわっ！」って言うてみる。「取っちゃうんですか」「取っちゃえ」「ちわ」「ちわ、じゃねえんだ」。だから時代劇の場合はひらがなで書かないとわからなくなっちゃうんだよね。「番頭さん」で言うっちゃうんだよ。「ばんとさん」なんですよね。それから「お師匠さん」「おっしよさん」で言うとき寺子屋か何か。芸事は「おっしよさん」、町娘なら「おっしよさん」で玄人筋が「おしよさん」。

ここでコーヒーが出る。

勝 「兵隊やくざ」でも面白い話があったん



だ。戦地行くときに、看護婦さんに、小山明子ややってたんだけど、好きになっちゃって「石鹸ください」っていう台詞があるのね。ところが「おまんこの毛をください」って言うたい。戦地で死んじゃうかも知れないんだから。その当時「それは書けません」。書く必要ないんだよ。俺だって台詞で「おまんこの毛をください」とは言えない。「それはさうですよ」「だから俺に任せろ」って。「ください」「え、毛?」「ええ。いやあの……」。ずっと下向いてる。怒って彼女が行っちゃった。チャーチャーと歩いて鼻紙でもポーンと捨てる。開けてみたら縮れた毛が一つあって。これは……。鉄兜の中に入れて、戦地に行ったらバリン。本当にその毛で命が助かったっていう場面を作ったことあるのね(註・これは「続・兵隊やくざ」65のシーン)。もちろん元の台本があるわけですよ。読んで、これだったらこういふことやりたいなって。

和田 膨らませていくわけですね。
勝 うん。

和田 田村高廣さんのインテリの兵隊との取り合わせが非常によかったですね。

勝 あれなんか一種のホモ映画ですね。
和田 そう思ったことはなかったけど、そう言えばそうですね。

勝 上等兵が女に飢えて困ったら、「上等兵、ただいま一等兵しよかせてもらいます」ってキョーッてできるんですよ。そうすると「たまには俺がやってやろうか」「そうですか。すみません。上等兵も結構うまいじゃないですか」。そういう場面作ってもいいぐらいの映画なんですよな。

和田 いまだっつらいかもしれせん。当時はダメでしょう。

勝 当時から僕は想像はしてたけど。なかなか受け入れられなかったけど。

和田 「悪名」もそういうふうには解釈すればそうなりますね。

勝 そうですよ。

和田 今日は本当にありがとうございました。
勝 もう終わり?

和田 いくらでも伺いたいんですけど、約束の時間になったんです。

黒澤さんはやっぱり大したもの

そこへ迎える車が少し遅れるという連絡が入る。

和田 じゃあ……。

勝 昔の映画は本当に奇抜なアイデアがあったよね。

和田 やっぱりお金のかけ方とかか時間のかけ方とかか。

勝 お金のかけ方もさることながら、職人と

いうか、あいつがああいうものを作ったんなら、俺はこっちの裏から行ってやるぞとかね、チャレンジ精神があるんですよ。ちよっとした煙草入れでも、伊達藩の何々様が煙草入れを頼んでる。じゃ俺はこういう煙草入れにしてくれ。みんな同じ物って作らないわけですよな。

映画の世界だと、自由に憧れるために死を選んだり、愛のために死を選んだり、その愛さえあつたらこんな悪い性質にならなかつたとか言い訳めいた話にして、恋愛ものにして人間の感情の中から出てくるストーリー。その相手役が日本人であつたり外国人であつたり犬であつたりするんだけど、今、相手役がう相手になつてるわけでしょう。ところが今度日本人が真似て、またそういうものを作ろうかって言つても所詮オリジナルじゃない。どっかの国で真似られるようなものを作らなくちゃいけない。そういう意味においては、黒澤さんはやっぱり大したものだと思うんですよ。

和田 「七人の侍」も用心棒も外国で貞似が出たんですからな。

勝 そうそう。

和田 今度、映画をお作りになるんだったら、ご自分ですか、監督は。

勝 さあねえ。もう、それがいいとはいへないとは思ふんですけどね。世間の評価がまだないから。ただね、やっぱりみんな自分なってますよね。例えば落葉が向こうから風で吹いて来ると来る。その落葉にぶつくと殺気を感して杖で突きたいんだけれども、サッと落葉が逃げる最初のうちは落葉を追いかけてる。シャラシャラシャラ逃げていく。ついに杖でサッと落葉を押さえた。こうして、好きなと

ころへ行きな」ってパツと離すと落葉がバラバラと飛んで行く。そういうトップシーンだ。「それでどうなですか」「何も考えてない」。トップシーンはそうやるけど、そこまでしかない。

そうするとその落葉が自分だから、落葉に糸つけて、フレームに入らないところで扇風機でガラガラッとやりながらバラバラさせるのも自分でやりたくなるんですよ。そこにも自分が出てくるわけですよ。座頭市は自分だし、お侍も、悪代官もどの役も全部自分がやってくるつもりだから、はじめからおしまいで自分が出てくるわけでしょう。だから肝心の座頭市の出番が少なくなることはあるんですね。

和田 そういう落葉のようなシーンがストーリーリと関係なく客には焼きつきますね。

勝 そうです。

和田 それが映画の醍醐味だけど。

勝 僕はそう思うんですよ。ところが、和田さんのようにそう言って下さる方が少なく、二百万人ぐらいいてくれればね、映画は作れるんですよ。それがやっぱり十万人とか二十万人じゃ二億でしょう。千円として。俺なんか金のこと考えたくないけれど、やっぱり自分の台所で作って人様のお店を借りるわけだから。借り賃も払えないっていうことになってくる。

そうすると、いかに予算通りに作るかっていうテクニクのある方が、いい監督とは言わないけれども使いやすいってことになって。昔は十日間で一本上げてた監督が今一週間で上げてますよって言うとその監督になって、五日で上げますよって言うとその監督になって、五日で私は二本上げますよって言う、その方が忙しくなっちゃうって言う、そんな

現状ですよ。

例えばもう一つは夕日があつて、座頭市の影がバツとあつて、歩いてくる。フツと殺気を感じると上から柿が一つビチャッと落ちるんですよ。それを斬っちゃった。柿を、シユバツと。本当はグチャツとなつてる柿がお刺身切つたようにスパツときれいに切れたところが二つあつて。市はきれいに切れたところを手で触つてみる、ヤダなと思うんですよ。こんな柿でも自分は切っちゃったんだ。ヤダな感じが、これから先の未来の市にながつて、何か出てくるわけですよ。

何でもない冬の海。「市さん、朝市があるんだけど来ないかい」「いつですか」「お前さんの日だよ」「え?」「市の日よ」「じゃ、そこに行かなくちゃいけない」って。そういう台詞が出てきちゃう。それが海上なのか、山なのか料亭なのか、その台詞といちばん合うのはどこなんだろう。釣りしながら言うのか、船の上がいいのか。

和田 つまり、台本の段階からいつも参加ですか。

勝 そうです。やっぱり自分で座頭市の痛いところ知ってるから、座頭市を傷つけることもできるし、座頭市に対して思いやりのある人間も書けるし、座頭市がいちばん嫌がるようなこともできるし。

和田 初期からそう?

勝 そうじゃないです。「座頭市」三本目で飽きましたからね、僕は。三本目ぐらいからちょっとやりたくなくなつたんですよ。八本目ぐらいからまたちょっとやりたくなくなつたけれど。

和田 今、この人だったらやってみたって監督はいませんか

勝 ストーリー主義の映画っていうのはどう

も。俳優さんの手足なり言葉なり目つきなり眉毛なり、溜め息だとか、その人の指先の動きだとか、その人の態度だとか、そういうのをずっと追ってるうちに、オブリガードのように、編集したらストーリーイが出てくる。そういうような映画を、僕は作りたいなと思ってるんだけど。

和田 そうなるとやっぱり自分で。

勝 そうなっちゃうんだよね。誰とやりたいということより自分でやりたいなっていうことになっちゃうんですけど。それは当たってないから。自分でね。でも、いつか当たると思ってるんですよ。当たるっていうのは興行的にじゃなくて。

和田 ものになる。

勝 ものに。日本の映画の中でこういう感覚のものは世界に出せるんじゃないかなっていう気がしてるんですけどね。ただバチンと来るものがないんだ。

ここで迎えが来る。

勝 すみません。どうもありがとうございます。

和田 ありがとうございます。

勝 シャベリっぱなしで。

和田 とんでもない。またゆっくりお目にかかりたいと思います。

勝 こっちこそいろいろ映画のことを教えてください。

このあと勝さんは新幹線で名古屋へ。別れ際、ぼくの本を車内で読む、と勝さんはもう一度言った。マネージャー氏が「この人は移動中はいつも本を読みます。」と補足すると、勝さんは「移動中に限らず、字書いてあ

れば読んでますよ」と言い、さらにマネージャー氏は「トイレで本読んで、三、四十分出てこないことも。世間では大酒飲みっていうイメージが強いでしょう。それほど飲みません。飲んで帰っても本読んでますもんね」

「ゆっくりお目にかかる」機会はその後訪れなかった。ただし、六年後の夏、日活撮影所の食堂で打合せ中の勝さんを見かけた。ぼくは「快盗ルビイ」の撮影中だった。立って勝さんに挨拶をし、あの時のインタビュアーであったこと、今は映画を監督していることを告げた。勝さんは「そうですね。大変ですね」といぬいな言葉で応えてくれた。それだけの立ち話であったが、「大変ですね」は異業種監督に対するねぎらいの言葉のように思えた。勝さんも大きく分ければ異業種監督の一人である。この時の勝さんは最後の監督作品となった「座頭市」の打ち合わせをしていたのだ。

なお、この種のインタビュアーは適当にダイジェストするのが常套であろうが、勝新ぶしを堪能していただくために、ほぼ全容を掲載する。話の中の台詞や対話は、すべて声色になつていて思つてください。

発想の飛躍について行きにくい箇所もあるが、あえて補足はしていない。よく読んでいただくと、勝さんの言わんとすることが理解できるだろう。映画作りが無類に好きであったこと、優れたアイデアマンであったことは十分に伝わる筈だ。そういう資質を上手に利用するプロデューサーに恵まれなかったことが、後期の勝新太郎の不幸だったのではないかと思う。